
その想いは変わりますか？CHILD STORY

畑山香樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その想いは変わりますか？CHILD STORY

【Nコード】

N3168X

【作者名】

畑山香樹

【あらすじ】

『その想いは変わりますか？』第三弾です。 今度は娘編です。

作者自身先のことはまだ見えないので詳しくはいえませんが、旦那、妻ときたら主人公は娘だと思われ
ます。 無表情な旦那と若作りな妻の遺伝を受け継いだ

娘のお話を是非是非見守ってください。

第一話 『お弁当は大事です』

コンコン。

「みどり〜。朝だよ〜」

十三年間毎日聞いているソプラノ声が届き、むくりと思い頭を起す。

「ふわあ〜……」

大きく欠伸をして脳になんとか酸素を送り込むが、そんなすぐには目が覚めない。

殆ど目を開けない状態で、私は既に覚えている部屋の構造を思い出しながら部屋を出る。

「おはよう」

目の前にいるのは、今日最初に出会ったのは私のお母さん。毎朝毎朝飽きずに朝弱い私を起こしてくれる。

自分も仕事で大変だというのに、非常にありがたい。

「はよ……」

そんな感情をおくびも見せず、素っ気なく返してしまったのは、思春期だと言うことで勘弁していただきたい。

「顔洗う？私も行くけど」

「……行く」

我が母に答え、共に洗面所に向かう。

その途中、ちらりとお母さんの顔を覗き見る。

樋口穂菜、三十六歳。

私の母親、の筈なのだが、容姿がおかしい。

どう見ても二十代なのだ。

加えて声も幼い為、母親というより歳の離れたお姉さんという思いになる。

この家は二階建てで、一階に部屋はトイレなどを抜かして三つで、二階には二つ。

一階はリビングひとつに父さんの部屋とお母さんの部屋で、二階は私の部屋に使われてない部屋。

私たちはすぐ側にある洗面所に二人で入り、顔を洗う。

「今日ご飯何？」

黙っててもよかったけど、そこはまあ親子の親睦と言つことにしておく。

「ん〜、確かパンにコーンスープだったよ？」

この発言で分かるとおり、この家では母親が朝ご飯を作るわけではない。

当然の如く私でもない。

となれば消去法で、三人暮らしのこの家の朝食及び夕食担当は我が父、樋口夕馬となる。

お父さんのご飯は、まあおいしい。

現在中学生二年生で給食の身であるが、どうして持参ではないのかと嘆くときも多々ある。

見た目も味も良しの弁当を、友人たちに見せびらかせてそれを独り占めするという、とても意地悪いが優越感に浸れる状況に心酔していたのだ。

そんなことを考えながらリビングに入ると、マーガリンの匂いが鼻孔をくすぐった。

食卓にはトーストにコーンスープ、ハムエッグ、牛乳が三人分並んでいた。

「おはよう二人とも」

それらを作り出した人物が私たちに挨拶した。

「おはようお父さんっ」

「はよ……」

母は陽気に、私は気怠げに返す。

言うておくがお母さん同様お父さんのことも嫌いではない。

無表情というのが玉に瑕だけど、よく気が利くし料理も上手。

この二人が両親でよかったと思うのは私だけの秘密。

私たちは自然と決まってしまった席に着き、両手を合わせる。

「……いただきます」「」

今時こんなに礼儀正しくご飯を食べ始める家庭があるだろうか？

学校ですら両手を合わせる、なんてことはしない。

因みにこんな風になってるのは特に理由はない。

両親にこういう礼儀を教わって、やめる機会がなかったからずっと続けているだけだ。

「小説どう？ 終わりそう？」

お父さんがお母さんに訊ねる。

お母さんは作家だ。

ととってもライトノベルだけど。

結構評判は良いとのこと。

「ギリギリかな。でも昼過ぎには終わるよ」

「そっか。じゃあ僕九時からだからなんか作っておくよ。何がいい？」

「ん〜、炒飯っ」

「了解」

と、こんな風に新婚バリバリのやりとりをしている間、私は黙々と
ハムエッグを口にしていた。

この二人の間に、どうやって入れと言うのだろうか。
これに乱入できる人がいるなら是非見てみたい。
不快などは感じてないので急を要しはしないが。

「じいちゃんさま」

最後に牛乳を飲み干し、リビングから退出する。
合掌は忘れない。

「お粗末様。深鳥^{みどり}」

「ん？」

しかし出る前にお父さんに呼び止められた。

「夕食リクエストある？」

我が家で週二位の間隔でやってくるリクエストタイム。

これは完全お父さんの気まぐれだから、いつやってくるか分からな
い。

私は内心めちゃくちゃ喜んでいる。

ああ、好きなものを食せるなんてなんと素晴らしいことなのだろう
か。

「ハンバーグ」

食べたいものはたくさんあったけど、今一番最初に思い付いた食べ物
を口にしました。

「分かったよ。楽しみにしててね」

「うん」

私はいよいよもってリビングから退出、自分の部屋に入って一年と
一ヶ月も経って着慣れた制服を手取る。

時刻は七時二十二分。

もうそろそろで友人の星野ニア^{ほしの}がお迎えしてくれるだろう。

早速制服に着替えると、ピンポンとインターホンが鳴った。

「はい」

リビングからお母さんの声と足音が聞こえた。

きっとニアなので私も玄関に向かう。

お母さんが玄関の扉を開ける。

その肩越しから見れば、予想通り友人ニアの顔が見えた。

「あ、ニアちゃん。お迎えありがとう」

「イエ、気ニシナクテOK」

彼女はハーフで、確か母方がアメリカの方の人。

肌は日本人にはない白、長く伸ばした煌びやかな黄金色の髪はツイ

ンテールにしている。
おっとり下垂れ下がった目尻は、お母さんに微笑みかけているためより下がっている。

「ニアお待たせ〜」

ずっと肩越しから見てるのもあれなので、声を掛けた。

「深鳥！待ッテナイヨ」

相変わらずの笑顔を私にも見せてくれて、とても癒される。

ニアとは中一からの付き合いで、切っ掛けはベタだった。

ニアはハーフということで周りから若干いじめを受けていた。

それに当時、お世辞にも日本語が上手いとは言えず、誤解されることばかり言っていた。

そんな時、何かは忘れたけど放課後先生に指名され二人きりでプリント閉じの作業をやらされた。

あの時のニアは可愛かった。

拙い日本語を使ってどうにか私とコミュニケーションを取ろうとあせあせしていた。

私の性格はお父さん譲りのようで、人の感情や考え方に聴くなっていた。

それを生かしてニアに正しい日本語を教えていき、代わりにニアに英語を教わった。

「じゃあ二人とも行ってらっしゃい」

「行ッテキマス穂菜サン」

「行つてきます」

私たちはお母さんの見送りを背に学校に向かう。

「深鳥、モット明ルイホウガイヨ」

突然言われ、流石の私も戸惑う。

「な、何が？」

ニアはずいっと顔を寄せてきた。

思わず一歩引く。

「明ルクナクテ穂菜サンカワイソー！」

なるほど、つまりお母さんに素っ気ない態度を取るなど、そういうことね。

「平気よ。あれが普通だから」

「フツーデモ！穂菜サンカワイソー！キスクライヤラナイト！」

「ゴホッ！！」

思わずせき込んでしまった。

このアマあ、自分の家族の常識を日本人に押し付けやがって……。

「どんな仲のいい家族でも日本じゃそんなことしないって」

「デモテレビで見タヨ？キストカセツク」

「アホ！！道のご真ん中で何言い出す！」

慌てて口を封じる為に肘をニアの頭上に振り落とした。

「イタイ！イタイヨ深鳥！」

痛みに堪えて涙目になる姿が可愛いと思ったのは内緒。

「当たり前よ！てか何見てんのよ！また霧一さんきりかず！？娘になんてもの見せてんのよ……」

霧一さんとはニアの父方なのだが、まあエロ親父だ。

何度も会ったことはあるけど、その全て私にセクハラ発言をしていくるといふ。

そのせいでニアは、ああいうセクハラ発言が普通と化されてしまったのだ。

一応母親のレリアさんが制裁をしているのだが、効果は薄い。

こんなおっとりした子がエロエロ発言して男に襲われないか心配だよあたしや。

「ソナンニヘン？アンナノ人ナラ当然。当たり前ノヨクボウダツテ
パパ言ツテタ」

「ま、まさかあんた経験済みとか言わないでしょうね……？」

この非常識人なら頷きかねない。

冷や汗によって背中に張り付くワイシャツを感じながら、ニアの答えを待つ。

「ソナナコトシテナイヨ？マダ私ヴァージン」

ホツと一息つく。

別にニアの行動を縛ろうとは思っていないが、近親相姦はアウトすぎる。

「デモ最近指ジャモノタリナク イタイ！ナンデタタクノ！？」

「だからそういう発言するな！これ常識！」

常識という言葉が聞いたようで、しゅんと黙ってくれた。

「……深鳥クライナモノ入レラレタ？」

「また唐突に……。今度は何？」

「ダツテ深鳥キゲンワルイ！クライナモノ弁当二入レラレタ？」

「へ？弁当って何？」

私が聞き返すと、ニアは不思議そうに答えてくれた。

「今日ゴハンモツテクル日。ジコアツテ学校ゴハンヨーイデキナイ」

「……………」

私はきよとんとした表情でニアを見ていた。

ニア可愛いな。

私が男だったら絶対襲ってる。

エロ発言してくるし。

おっと、つい現実逃避してしまった。

ニアはなんて？

今日ゴハンモツテクル日？

つまりお弁当の日？

昨日をさかのぼる。

生憎授業態度がよろしくない私は、六時間目に体育という体力を奪う授業があったため帰りのHRは寝ていたため覚えていない。

因みにニアは、言葉は間違えるが嘘は言わないし、冗談も言えない。

「マズいッ!!」

私はダツシュして自宅へ戻る。

幸い喋りながらの登校だったため距離は短い。

到着してすぐに玄関を開けると同時に叫ぶ。

「お父さんッ!!」

「どっした?」

お父さんは未だリビングにいるようで、姿は見えないが声は聞こえ

る。

靴を乱雑に脱ぎ、リビングに入る。

案の定お父さんに、お母さんまでいた。

「あのさ！ホント申し訳ないんだけど、今からお弁当一人前頼める！？今日お弁当だった！！」

「はいはい。確か授業八時二十分からだよな？じゃあそれまでに作って持っていくから。ニアちゃんもいる？」

「へ？」

「才気ヅカイイイデス。デモ夕馬サンゴハンオイシイヨ！」

……何故か、隣にニアがいた。

「ありがとう。じゃあおやつ的なもの作るから後で二人で食べてよ」

「ちょ、待って！！」

慌てて制止をかける。

何故にお父様は普通にニアとはなしている？

私の表情を読みとったようで、いつも通りの無表情で淡々と話す。

「ニアちゃんは最初からいたよ。必死に走って来た深鳥の後ろに着いてきてたんだよ。だよな？」

「ハイッ」

そうだった。

この子、私より足速いんだった。

おっとりの癖に。

まあそこは、私が足が遅いと言つのもあるのだが。

「ニアちゃんおやつクッキーでいい？」

「私クッキースキ！夕馬サンモ好き！」

そういうとニアは私から離れてお父さんのところへ行き、持ち前のぷるんとした唇をお父さんの唇に近づける。

「ストップ」

しかしそれはお父さんの右手に遮られた。

「ニアちゃん、日本でそういうことはあまりしちゃだめだよ？特におじさん、もう結婚してるんだから」

「デモ日本ジャ、女子チューガクセーガ大好きな大人ガタクサンイ
ルツテ言ツテマシタ」

「……………」

お父さんは無言で私を見つめてきた。

「待ってお父さん！私じゃない！私は変なこと教えてない。この子の父親が変態なの！」

「モウ深鳥、ソナニオ父サンヲホメナイデヨッ！」

「……………」

樋口家は皆どん引きした。

「……………あ、深鳥。もう学校始まるだろうから行きな。遅刻するよ」

「う、うん。分かった」

私はニアの手を引いて家を出る。

「あ、そうだ深鳥」

すると何故かお父さんに呼び止められた。

「ん？どうしたの？」

「お父さん的には素の深鳥の方がいいんだけどな」

「あ、それお母さんも思った」

五秒くらい固まった。

「ッ……！」

顔が真っ赤になるのが分かる。

そんな姿を見られたくなく、走って家を出る。

「行ってきますっ!!」

挨拶を忘れずに再び学校に向かった。

第一話 『お弁当は大事です』（後書き）

深鳥「皆さん初めまして。樋口深鳥です」

ニア「はじめましてー。星野ニアデス」

深「とまあ、そんなこんなで始まった『その想いは変わりますか？』シリーズなんですが、まさか第三弾まで続くとは……」

ニ「予想外ダケド、ウレシイヨ」

深「まあそうだね。これを読んでくれる人は前作も読んでくれる人なのかな？そうじゃなかったらあんまり前の話は言わない方がいいのか」

ニ「ネエ深鳥。コノシヨウセツ、コノ後ドウナルノカナ？」

深「どうなるって？」

ニ「コノ作者先ノコトカンガエナシダヨ」

深「あゝ、作者のことだからなんとかなるでしょう」

ニ「ソレデイイノ？」

深「とやかく言ってもどうしようもないからね。ではまた次回もよろしく願います」

ニ「ヨロシクお願いシマス」

第二話 『転校生ってやっぱりありがたい』

「あゝ、どうしよう」

浅村中学校二階二年Bクラス一番後ろの廊下から二列目の席。

私はその席で伏せる。

クラスにはすでに半分以上の生徒がいた。

現在六月初めで、衣替え期間だから夏服の人もしれば冬服の人もある。

割合的にまだ冬服の人が多い。

変えるのがめんどくさいのだろう。

かく言う私も冬服のままだ。

「どうしたのみどりん、そんないかにも声をかけてくれオーラを出しちゃって」

「深鳥朝カラコーナノ」

私の周りで声をかけてくるのは、小金井裕子（こがねいゆうこ）。

頭はそれなりによく、ニアと同じく親友と言ってもいい仲だ。

「……ちよつとね、両親の前で恥ずかしい所を見られちゃって」

「何あったの？」

「私フツウ二見エタケド？」

ニアに何を言っても分からないだろう。
だってあれがニアにとっても普通なんだから。

「……実は私さ、家じゃ無口なんだ」

「「……ええええ（エエエエ）！？」「」

やはり意外なんだろう。

私基本学校じゃ騒がしい方だし。

「それマジなの？」

「マジよマジ。親と一言くらいしか話さないし」

「仲悪い、訳じゃないよね？」

「ゼンゼン。仲イイヨ」

「じゃあなんで？」

なんでと言われましても……。

「思春期だから？」

「なんで疑問系なの？」

「私も分かんないし。てか普通に話せる？。両親と」

「話せるけど？」

「私毛」

「え〜、ほんと？よく恥ずかしくないね」

「恥ずかしがる要素ある？」

「ソウダヨ。ソシナノ二人デー緒ニハナビデオ見レバ」

「「エロ発言やめろッ！！」」

私と裕子はツツコミを入れる。

私は足を踏み、祐子は頭にチヨップ。

「フェ〜、二人ガイジメル〜！」

「ニア、そういう発言やめた方がいいよ。絶対引かれるって」

呆れながらも、真剣な口調で言う祐子だが、ニアは分かってないよ
うで首を傾げる。

「へ？デモ二人ハ引イテナイヨ？」

「私たちは特別なの」

「トクベツ……ジャア二人ハトクシュデ変態ナンダ！」

「……………ねえみどりん。私たち何時から特殊で変態になったんだ
ろっ」

「今日からでしょ」

「……まるで他人事みたいに言ってるけど、みどりんだってその特殊で変態さんの一人なんだよ？」

「祐子、昔の人はこう言った。『無駄に付き合う必要はない』」

「そんな言葉初めて聞いたけど、取り敢えず分かった」

「私モ話ニイレテヨ」

ひとりぼっちが嫌なようで、拗ねてただをこねる子供のような態度をとるニア。

この年頃になれば、そんな子供じみた態度は笑われる対象になるのだが、何故かニアの場合それがしつくり来る。別にロリじゃないのに、不思議だ。

「そうだね……。じゃあ、ニア今日転校生来るの知ってる？」

裕子がちよつと得意げな態度で訊ねる。

そんな情報、先生からは聞いていない。

「テニコーサー？」

「そ。詳しくは知らないけどウチのクラスだって」

「へ」。深鳥知ツテタ？」

「ニア、教室ちゃんと見ようよ」

「エ？ナンデ？」

やっぱり気づいていないのか。

「私の左隣。机がひとつ多い」

二人とも言われてそちらを見る。

ニアはともかく祐子も見るといふことは、この子も気づいてなかったのか。

「おおほんとだ、いつの間にかあるし。流石みどりん」

「何処が流石よ。あんたらが見てないだけでしょ。それよりそろそろチャイム鳴るよ。席着きな」

言った瞬間、謀ったようにチャイムが鳴る。

「おゝい、席着け。朝の会始めるぞ」

気怠げに言うのは風間かざま浸先生。

二十五歳という若さで我が二年B組の担任をに担っている。話口調に反して爽やかな顔立ちは、女の子たちの間で人気がある。

「せんせ。転校生って野郎？可愛い女の子？」

フレンドリーな風に話しかけるのは、どのクラスにも一人はいるだろう目立ちたがり屋男子の山田やまだ真。

この人は我がクラス委員長。

「喜べ野郎共。イケメン男子だ」

『きゃー！ーっ！』と男子ではなく女子の歓声が響き渡る。

反対に男子は明らかに落ち込んでいる。

因みに私は無反応。

周りに知り合いがいれば変わるんだろうけど、周り皆男子であんま話さないからいつも通りのテンション。

「おーい、源！入ってこーい」

先生に呼ばれて扉が開く。

そこには、先生と同系統の顔を持った男子がいた。

格好良すぎて、クラスが静まりかえる。

私もふつうに見とれていた。

男子は周りを気にしない風に先生の隣に立つ。

「ほい、それじゃ自己紹介」

「源深鳥みなもとみどりです」

「はあ？」

転校生が自己紹介しているというのに、つい声が出てしまった。しかも恥ずかしいことにその声はクラス皆に届いてしまった。

今日は厄日だな。

「どうした樋口　　ってそうか。源よかったな。後一番後ろの女子、同名の樋口深鳥だ。漢字も同じだぞ。しかも隣。お前の一番最初の友達だ」

勝手に決めるなあんぽんたん。

別に友達になりたくないわけじゃないけどさ、なんか嫌じゃん。こつやって表立って言われると周りはそんな風に見てくるし、転校生がかつこいいから女子に嫉妬されてしまう。耐えられる自信はない。

「えっと、よろしく」

いい性格　　いい意味　　なんだろう、わざわざ挨拶してくれた。

「どうも」

挨拶されて無視するほどいい性格　　悪い意味　　ではないので、ちゃんと挨拶を返す。

「よし、仲良くなったところで自己紹介再開しとけ」

「あ、分かりました。ええ、六月という中途半端な時期の転校は親の気まぐれらしいです。勉強より体を動かす方が好きです。後は…
…何言えばいいか分からないので気軽に聞いてきてください」

緊張のない様子で述べる転校生　　いや、そろそろ名前を呼ぼう。

源君はスラスラ言っているの、人前に出ることに慣れているようだ。

カリスマ性がありそうだ。

「みじけえなおい。これじゃ暇じゃなか。連絡事項なんにもねえぞ。あゝ、生徒諸君。時間まで質問タイムにしよう。源はその場に待機。司会役として山田と樋口」

「ちょっと待ってください」

名前を呼ばれ、即座に待ったをかける。

因みに私は先生に発言するのに抵抗ない人。

「なんで私なんですか？普通こういつの副委員長じゃないんですか？」

副委員長は夏目紗里。なつめさじ

その子を見れば、かなり驚いた表情をしている。

彼女も自分が選ばれると思っていたようだ。

彼女は山田の幼なじみで、よく一緒にいる。

というか片思いをしている。

山田自身気付いておらず、でも一緒にいるのが当たり前な存在である。

恐らく、というかほぼ確実に山田が委員長になったから夏目さんは副委員長になった。

「お前、源と名前同じだろ？」

「私関係ないじゃないですか」

「じゃあお前源と仲良くしたくないのか？」

「そういう訳じゃありませんけど」

「じゃあやれ」

「分かりましたよ……」

先生は窓側に置いてあるパイプ椅子に座って腕を組んでいる。

ここからは見えないが、十中八九目をつぶっている。

新米教師のくせに生意気な、とか他の先生に思われてないのかな？

そんなことを考えながら、ゆっくりと席を立ち上がって前に行く。

まあいいか。

こっちの方が出口近いし、すぐ弁当を取りにいける。

夏目さんには悪いけど行かせてもらおう。

既に山田が源の隣に立っていた。

「よし野郎共！質問したい奴はいるか！？」

ああ、どうやら男子にスイッチが入ってしまったようだ。

これは私が止め役に入らないといけないんだろうか。

いつもならその役は夏目さんなのに。

「はい！」

「はい沢田さわだ！」

「イケメン死ね!!」

『そうだそうだ』と他の男子の叫びも聞こえる。

その光景に、源君はきよとんとした表情で眺めている。

そんなのはお構いなしと言わんばかりに続けられる。

「頂きました、死ね死ねコール!!というわけで死ねッ!!」

くるっと向きを変え、未だきよとんとしている源君に襲いかかる。

私はこの二ヶ月で既に見慣れた山田と夏目さんの動きを思い出しながら、教卓の脇にかけられたハリセンを取り出して振りかぶる。

「早速転校生に絡むんじゃない!!」

「フベツ!?!」

振りかぶったハリセンは山田の顔面を叩く。

パン!といい音が響きながら後ろに倒れていくが、すぐに手を付いて立ち上がる。

「貴様邪魔をする気かア!?!」

「当たり前よ!止めなきゃ何する気!?!」

「何って、殺すに決まってるだろ?」

これを真顔で言うんだから、いつも夏目さんは大変だ。

「生憎、先生のせいで夏目さんの役目受け継いじやったからね。それにちょっとやってみたかったのよ、ハリセンでぶっ叩くの」

「……………」

何故か黙ってしまった。

あれ？

私対応間違えた？

そう思っていると、

「ぜひぶっ叩いてくださいッ!!」

頭下げをお願いされた。

「変態かお前は!!」

思わずツツコんで頭を垂れている山田の後頭部をハリセンで叩いた。

「ハフウツ!! もっと!! もっと強くお願いします!!」

「山田ア! 流石にそれはマズいでしょ!! 夏目さんなんとかして!!」

待ってましたと言わんばかりに勢いよく夏目さんは立ち上がり

「樋口さん！私の真ちゃんとイチヤイチャしないで！！」

「なんでこの状況でなんでイチヤイチャしてる風に見えるの！？目えおかしくない！？」

「紗里は黙ってる！てか誰がお前の真ちゃんだ！？ささ、あんなやかましい女はおいといてどンドン叩いてください」

「おいテメエ真！何深鳥ちゃん独占してんだ！？NIB協会の掟忘れたのか！？」

必死に叫ぶのは、先程源に死ねと言った沢田銚ちゅう。

彼の言ったNIB協会とは、二年B組の男子ほぼ全員で構成された非公式団体団体。

団体と言っても別に権限みたいなのは無い。

目的と言えば、いかにリア充を殲滅するか、いかに他人を蹴落としてリア充になるか、というもの。

このメンバーは皆当然彼女はいない。

山田はリア充じゃないか微妙なところだけど、まだ生きてるということはセーフなのか。

「黙れッ！！お前ら立ち上がるなよ！？先生がそう言ったんだからな！」

というかもしかして私って結構人気がある？

私に叩かれない物好きがいるなんて。

それとも女だからという理由？

もし後者ならぜひ他の女子に譲ってあげよう。
特に山田を叩く役は夏目さんに。

というかそろそろ源君を放置させてるのが可哀想になってきた。

どんな様子かと後ろを向くと 誰もいなかった。

「あれ？」

呆れて席に戻った？

源君の席を見るが、いなかった。

何処に行ったのか、言い争っている男子たちを余所に考えてみるが、私の視界のある一部に違和感を感じ、そこから全てが繋がった。

あの女あ。

一応目を離れた私も原因の一端を担っているので探しに行こう。

教室から出ていこうとした時

「深鳥ちゃん！明日キャロットゼリーを献上しますッ！！」

ピタッ。

私の足が止まった。

俺は何故か今同じクラスになった女子の手に引かれて廊下を歩いている。

さっきまで俺は自己紹介をしていて、すると何故かクラスがカオスな状況になって、キョトンとしてたら彼女が俺の手を掴んで外に出たのだ。

「あの〜、まだ朝の会途中なんじゃないの？」

その証拠に他のクラスはとても静かで、先生の声しか響かない。どうやら俺の入ったクラスは異常らしい。楽しそうだからいいけど。

「そんなの関係ありませんわ」

マンガで言うお嬢様口調の彼女は、銀髪の右側だけを三つ編みにしてそれを前に持ってきている。

その長さは胸に来るほどなのに、残った方は肩にかかるかかからないか程度の長さ。

三つ編みを解いたらどうなるのかなとちょっと見たくなる。

「関係ないって……。じゃあその、何処に向かっているの？」

「一階の階段裏ですわ」

「なんか人気ひとけがなさそうな場所だな……。そう言えば名前を聞いてないんだけど、聞いていい？」

「あ、申し訳ありませんっ！すっかり忘れてましたわ！わたし、吉祥ヶ島きちしよがしま火乃己ひのこと申しますの。吉祥ヶ島グループの孫娘ですわ」

吉祥ヶ島グループ。

確か子供用の玩具や嗜好品によってかなり上まで上り詰めてきた会社だ。

そのご令嬢がこんな公立の場所にいるなんて。

「ああ、もしかして敬語の方がいい？」

「何言ってますの？わたしたちは同学年ですわ。そのような気遣いは無用ですよ」

「分かった。じゃあもう一つ聞きたいんだけどさ」

「なんででしょう？貴方様のお聞きしたいことはなんでもお答えいたしますわ！なんたって……」

ん？

後半も何か言ってたけど、『なんたって』から後が聞こえなかった。

しかし、何故か顔を赤くしてる。

「吉祥ヶ島、最後が聞こえなかったんだけど……なんて言ったの？」

「い、いえ、まだお気になさらず。すぐに分かることですよ！」

「ならいいけど」

言いたくないならそれでいいか。

「ところで、お聞きしたいことは？」

と、ここまで話していると目的の場所とやらに着いたようで、吉祥ヶ島は足を止めて俺と向き合う形になる。

「いや、偏見かもしれないけどさ、令嬢なんだから私立中学に行かなかったのかなって」

「ああ。それはお父様もそうすると仰られていましたわ。その方が身のある教養が入ると。ですが、わたしは私立に行かず、この学校に来れたことに幸せを感じていますわ。だって」

ガシッ。

「へ？」

思わず間抜けな声が出してしまった。

いきなり、俺の二の腕辺りの服をがっしり掴んできたのだ。

その後押され、壁に背中を付ける形になる。

「だって、こんないい男と同じクラスになれたんですよ？はあは

あ、もう、さいつこう、ですわっ、はあはあ……。ああ、なんてわたし好みのお顔ですの？もっと、その端正なお顔を間近で見たいですわ……」

彼女の目に熱が籠もってるのが分かる。
頬を朱色に染め、なんとも艶めかしい。

彼女の右手が俺の頬に触れた瞬間、ビクッと肩を揺らした。

マズい。

全身に怖気が走る。

何がマズいかは分からないけど、とにかくマズい！
急がないと喰われる……！

本能的に察知した俺は足に力を込め、全力でその場から離れる。

拘束しているのは彼女の左手のみ。

とても細く、綺麗な腕では男の俺を捕らえたままでいるのは無理がある。

案の定対した力もなく拘束を解除できた。

さて、後は逃げるのみ　と思ったのだが、言うておくことがあったので体をひねらせながら言う。

「吉祥ヶ島、俺の顔を『端正な顔』って言うてくれてありがとう！めっちゃ嬉しかったよ！じゃあな！……」

お礼も言ったことだし、もう彼女に捕まらないように逃げる。

さあ何処に逃げようか。

とういかまだ俺学校内を把握しきれてない。

それにチャイムもまだなようだから迷惑かけないように外に行くか。

昇降口に向かい、上履きと靴を交換して外に出る。

やっぱり動き回るよりどっか留まってた方がいいよな。

辺りに隠れる場所がないか探していると、門の前で誰かが立っていた。

こちらに入ってくる様子もなさそうだし、誰か待っているのだろうか。

腕に巻いている時計を見れば、八時十七分。

確か朝の会が終わるのが二十分だから三分待つのか。

お節介かもしれないけど届け物なら学校探索の一環としてやっておこうかな。

そうと決まれば門の前まで小走りで向かう。

その人は三十代くらいの男性で、右手に小包を二つ持っていた。やはり誰かの忘れ物を届けにきたのか。

「あの、すみません」

「はい？」

「もしかして誰かの忘れ物ですか？もしそれでお節介じゃなければ僕が届けますが」

「……………」

じっと俺の顔を見つめる男性。

どうしたんだろう。

やはり怪しかったかな。

「どうしました？」

「あ、ううん。大丈夫。じゃあ頼めるかな。二年B組の樋口深鳥なんだけど」

「あ、樋口さんですか」

「同じクラスみたいだね。なんで君がこの時間に外にいるかは聞かないけど、休み時間になっただらすぐ外に来ると思うから入れ違いにならないように」

「分かりました」

「じゃ、深鳥をよろしくね。あの子親贖罪じゃないけど気の利く方で優しい子だから相談ならあの子にしたらいい答えが返ってくるかもよ、深鳥君」

そういつて男性は俺に二つの小包を渡して去っていった。

「……あれ、なんで俺の名前知ってたんだ？」

.....

「ま、いいか」

考えても分かりそうにないし、あの人の言った通り行き違いにならないように早めに教室に戻ろう。

「.....」

「オラオラオラ！！ぶっ叩かれたい奴はどんどん前に出てこいやあ！！」

教室に戻ると、更にカオスな状況になっていた。

樋口が男共をハリセンでぶっ叩いていた。

しかも

「はい！次！次僕お願いします！！」

男子の方もノリノリという。

「何処が優しい子なんだ？」

あの人の言葉に疑いを持ち始めた。

第二話 『転校生ってやっぱありがち』（後書き）

祐子「なんかシユールすぎるわね、今回……。まあいつものことなんだけど」

深鳥「ホント、客観的に見たらただの変な集団よね」

祐「その集団の一人にはみどりんも含まれてるけどね」

深「何言ってるの？そんなこと無いわよ」

祐「（まさか自覚ない、訳じゃないよね？）」

深「それよりさ、早速お気に入り登録してくれてる人がいるのよ。ホントありがとうございます」

祐「ありがとうございます。それから、だいたいこのくらいのペー
スで更新していききたいと思います」

深「まあ事務的な伝えることは終わり、実は転校生の源深鳥。この名前って考えなしに、『私と同じ名前の方がおもしろくね？』って感じにつけたのよね」

祐「まあ作者だからしょうがないよ。で、裏話ってこんなもん？」

深「別に裏話をする場所じゃないし、そんなある訳じゃないんだけどね」

第三話 『二人に繋がりました』

「ほんつとありがとうございます！！」

今日は一時間目から移動教室で、現在その移動中。

私は今日転校してきた源君に頭を下げてお礼を言う。

「別に気にしなくていいから。俺も偶然だったし、お節介なところもあつたしな」

ぐっ！

ここですっこり笑顔で言ってきた、なおかつ謙虚とか、好青年過ぎる！

今までアホやつてた私がバカみたいじゃないか。

まあハリセンで人を叩いただけで給食ゲット出来たんだから後悔はしてないけど……まさかお父さんの約束を忘れかけるなんて。

ここだけは悔いが残るけど、まあ結果オーライだから良しとしよう。

「ホントありがとう。あれ届けてもらってなかったら私死んでたわ」

「あれってさ、やつぱ弁当？」

「そーだよ」

源君に答えたのは私ではなく祐子。

裕子は背後から私にもたれ掛かってきた。

女の子だから言うのはどうかと思うけど、私も女の子だから言おう。

「重い」

「うるさい。これでも五百グラム減量した。で、話戻すけど、みどりのお父さんめっちゃ料理うまくて、しかもみどりんは食べるこ
とがめっちゃ好きなの。だからもう給食とかの為ならなんでもする
よ」

「なんでもは誇張し過ぎでしょ」

「少なくともハリセンで男共をベシベシ叩くよ」

「あゝ、あれかあ」

その光景を思い浮かべたのだろう、源君は苦笑している。

べ、別に誰にでもあんな風にしてるんじゃないんだからねっ！

などというツンデレじみた台詞を吐き出してもいいのだが、そう
なると私は源君から誤解、女子からは嫉妬を受け、源君は男子から制
裁を受けることとなる。

それは誰も幸せにならないため、なんにも言わない。

喉の辺りまでせり上げてきた言葉を飲み込んだとき、祐子の側に控
えていたニアが口を開く。

「私見タコトアルデス！ジヨーオーサマガ裸ノ男ヲムチデブツタタ

」

ブンッ！

私と祐子は無言で手刀を両側の首に放った。

「ミュフツ!?!」

奇怪な声を上げながら、涙を浮かべるニア。

スリスリと叩かれた場所を撫でる。

「え、いきなり何してんの?」

「気にしないで。この子放つといたら、思春期の男子にはやばい発言いっぱいしまくるから。あ、紹介忘れてたけど、私の後ろにいるのが小金井祐子。で、このエロ女のハーフが星野ニア」

「モウエロ女ナンテ、ホメテモ愛液シカデナ」

「フンツ!」

裕子の強烈な蹴りがニアのお腹にクリーンヒットした。

「ギユフツ!?!」

どうやら溝に入ったようで、うずくまっている。

仕方ないので肩を貸す。

「なあ、流石にやりすぎじゃないのか?」

ちよつとご機嫌斜めな源君。

初見な人にはちと刺激が強かったかな。

「逆に言うけど、あんた別に私たちのこと知らないでしょ？これが私たちの普通なの。加減もちゃんと出来てるし、ニアも虐められてるなんて、軽口で言う程度で本気とは思ってないの」

「ソーダヨ。イタイケドヘーキ」

私の発言にニアはにっこり笑顔で答えた。

更に裕子は付け加えた。

「ま、初めての人には刺激が強いかもしれないけど、ホント気にしないで」

私たちに言われたのが聞いたようで、渋々納得してくれたようだ。

そうこう話してるうちに、目的の教室に到着した。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「何？」

ニアの席に集まると、源君から訊ねられた。

「ここって昼休み外に出ていいの？」

「え？原則ダメだけど……なんで？」

裕子はどうやら分かってないらしいけど、少し考えたらすぐ分かる。

「昼ご飯のことですよ。多分事前に、今日給食無いの知らないから、

食べるもの持ってきてないんでしょ？」

視線で源君に投げかけるが、キョトンとした顔をされた。

これも見当はずく。

「なんで分かった、って顔してるけど、ちょっと前に弁当の話をしたときから、困った風な顔してたから。それに昼休みにわざわざ買いにいく物って言ったらご飯ぐらいしかない。授業に必要な物なんて、まだ必ず揃えなければならぬっていう立場でもないし。どう？合ってる？」

「あ、ああ、合ってるけど……なんで分かるんだ？」

「私、観察力だけはいいの」

それを強調させるように指で目を指し示す。

「深鳥ネ、皆ノソーダンヤクナダヨ」

「相談役？」

「まあある意味なんでも屋だよ。基本恋愛相談なんだけどね。たまに喧嘩の仲裁とかもしたりするよ。その代わり何か食べ物献上しなきゃいけないんだけどね」

「ちよいまち。それ誤解だからね」

祐子の言葉を即座に訂正する。

誤解されて、酷い奴なんて思われたくないし。

「逆よ。最初に頼み事してきた人がお礼についてパンくれたの。その人、私が食べ物好きって分かってたから。で、そこから他の人も頼み事してきた人が食べ物くれて、その繰り返しでいつの間にか、食べ物渡さないと相談できないって風になっちゃったの」

「断らないのか？ もらうの」

「断る理由がないからね。私は一切要求してない。その上で向こうが私に食べ物をくれるのは、本人が満足するためなんだから。あからさまに苦渋の選択で私に頼み込んでくる人にはちゃんといらないうて言ってるわよ？」

前にも言ったが、そこまでいい性格はしていない。

「ふうん。あ、相談で思い出したんだけど」

一旦区切ると、ジツと私を見つめてきた。

「何？」

「俺たち昔どっかであったことあるか？」

へ？

何？

まさかのナンパ？

このタイミングで？

流石の私でもこの展開は予想外だった。

というか相談とこのナンパの繋がりは何？

私の驚きの表情をどうとらえたのか、話を続ける。

「いやな、お前の弁当持ってきた人との話でな。濃いめの茶髪で無表情、身長俺よりちよい高めの人って、お前の親父さんで合ってるよな?」

「合ってるよ」

それ以外に私の弁当を持ってきてくれる人はいない。

「その人にさ、名前呼ばれたんだよ。初対面だと思ってたんだけど、どっかで会ってたのかと思ってさ。会ってて俺が覚えてない、だったら悪いじゃん」

源君の話を一つ一つ噛みしめながら吟味していく。

少し経って、嫌な予感しからないからため息をつく。

「どうした?」

「源君さ、なんか他にない?隠してること、って程じゃないと思うけど、変だな〜って思ってること」

「変なねえ〜。……あ」

何か気付いたようで、自分のポケットをまさぐっている。

「お袋からここに行けって言われてんだけどさ、住所分かんないんだよな」

取り出した紙を私に差し出したので見せてもらった。

そこには住所がかかれていた。

私の見覚えのある住所。

これで殆ど状況を把握した。

「ああこれね」

「はあい、授業始まるから席着きな」

説明しようとしたとき、ちょうどいいタイミングで先生が入ってきました。

「じゃあ説明は後でしてあげるから、取り敢えず先生のところに行つてきな。後、お昼もどうにかしてあげるから」

そう言つて私は自分の席に戻った。

源君とはちょっと離れてるのに、向こうはお構いなしに言葉を返してくる。

「なんか悪いな、何度も世話になって」

「弁当の礼よ。気にしないで」

早く行けって意味で手を払うように動かす。

それを見て、実際時間もないので源君はさっさと先生のところに行った。

さてと、源君のお陰でまたややこしいことになりそうだな。

授業は楽だった。

別にこの学校なことをバカにすれ気はさらさらないが、どうやら俺のいた学校の方が進みが一段階分早いらしい。
その為、今やってる内容は既に学んだ。

だから授業は聞き流し、樋口が解いたという謎、ってほども無いことを考えてみよう。

まず、どうして樋口の親父さんが俺の名前を知ってるか。

.....

うん、初っぱなから詰んだ。

何をどう考えればいいかさっぱり分からない。

思い付くのは、やっぱり昔どっかで会ったってことくらいだ。
でもそれ以上のことは考えられない。

どうやら神は俺に謎解きを出来ない風に作り出してしまったらしい。

ならばと、俺は神の教えに従って考えるのをやめ、俺と同名の彼女の答えを待とう、という結論に達した。

今更だが、俺は別にどこぞの宗教の人間ではない。

退屈な授業が終わり、早速樋口の元へ向かう。

その際視線を感じたが、なんなんだろうか？

まあ実害は無いので気にしない。

「樋口」。早速教えてくれ」

そう言うと、樋口は何故かため息を付いた。

「どうした？」

「あんたはもつと周りへの影響力を考えろ、って言いたいけど、言っても無駄みたいだから言わないわ」

「すでに言ってるじゃねえか。それに影響って、俺なんかしてる？」

「別にもういいわよ。で、どうする？まず結論から知りたい？それとも順序立てて？」

授業に使った教科書やらノートやらを抱えて立ち上がる。

そのまま外に出そうなので、ちょっと急いで樋口と肩を並べる。

「じゃあ結論から」

「今日私んちであんたたち家族の　まあ予想だけど中心は源君の歓迎会するわ」

「ちょっと待て」

流石に話が飛びすぎてる気がする。
ていうかなんで初対面の奴の家に行って歓迎されにやならん？
嫌ではないけど。

「説明するわよ。まず、お父さんがあなたの名前を知ってたのは、多分私らの親と源君の親が仲がいいから。それはさっき見せてくれた住所から分かる」

俺も何も考えないバカではないから、ちょっとは読めた。

「つーと、これってお前んちの住所？」

先ほどの紙をポッケから取り出す。

「そ。で、あんたを深鳥って認識出来た理由は、向こうが事前に今日源家に来るって知ってて、尚且つ転入生って分かったから。後源君に両親の面影を感じたからかな」

「話の腰を織るようで悪いが、俺転入生って言ってないんだけど」

俺の姿を見て、転入生かどうかなんて分かるはずがない。
もしこの学年の生徒全員の顔を覚えていたらなきにしもあらずだが、
そこまでするだろうか。

「その判断は割と簡単よ。特に源君に対してなら」

「俺はそんなに転入生顔をしてるのか？生憎人生で一回目だが」

「あんだ、前の中学の制服ってブレザー？」

当たっていた。

「お前はエスパーかなんかか？」

「違うわよ。あんだの学ラン、シワが殆どないし、襟の部分もよれてなく、汚れもなさそうな新品。そんな物を二年で着る人なんて殆どいない。意味分かるでしょ？」

「制服は三年間変える必要がないってことだろ？」

「そ」

制服を見て新入生かどうかなんて判断出来るという発想は、俺にはなかった。

多分物に対する俺の見方と樋口の見方は全く違うのだろう。ちよつとだけ、樋口がどう見てるのか知りたくなった。

「で、歓迎会の方は簡単よ。両親同士が知り合いで、転校初日に私んちに来てって言うんだから、それしかないわよ。恐らく親が子供にドッキリ仕掛けたかったんだと思うわ。同学年で、しかも名前が同じ異性がいるなんて！みたいなの」

「うわゝ、もしそうなら悲しすぎるな」

ドッキリの準備中にそのネタがバレてしまったんだから。

「向こうの予想外は私たちが同じクラスになったことね。他のクラ

スに転入生が来て、私反応しないし」

「俺は……同名の奴がいたら気になって見に行くかも」

「じゃあきつとあれよ。もしそう言う展開になって、ほんのちょっとだけ会話する仲になったのに、何故か一緒に歓迎会やってるって
いう漫画的展開を望んでたんじゃない？」

「ホントそれだとしても台無しだな」

「そうね。でも、どうしてこんな中途半端なタイミングで、なんて聞かないでね。そこまでは分からないわ」

「そーだよなー。今日六月六日？」

「だね。誕生日？」

「俺は十月だ」

「私は八月」

「違うな」

「違うね」

気付けば俺は今日知り合ったばかりの樋口と違和感なく会話してた。まるで昔からの友達かのように。

これも親の遺伝が関係してるんだろうか、などと考えていた。

「そういやね」

「何？」

「さっきから後ろから視線を感じるんだけど」

「ああ、気にしたら負けよ」

なんとというか、ネットリしたような、嫌な視線を感じる。

授業始まる前からずっと感じていて無視していたが、流石に気になつてくる。

しかし慣れてきているようで、樋口は全く動じていない。

「あ、そうそう。昼ご飯のことなんだけど、窓側の列の前から三番目の相川紫音あいかわしおんに頼めばいいよ」

「なんで？」

「あの子細めで小食なんだけど親が『よく食べなさい』って言って一人じゃ食べられない量の弁当作ってくんの。言えば余りもらえるよ」

「なんで弁当の量知ってたんだよ？」

中学は給食のはずだから弁当なんてそうないんだけど。

「部活が一緒なの。バレー部」

なるほど。

「いつもお世話になってるけど、言えば喜んでくれるよ」

「ホントわりいな」

「それくらいにあの弁当は大事なの」

「旨いの？」

「そりゃもう」

「ひどく」

「ダメ」

「即答か」

「それとこれとは話が別。皆の羨ましがる顔が見たいんだから」

「最悪だな」

「ま、クッキーくらいならあげるよ」

「もう一つの包みの方？」

「そ。友達用について」

「いいなそれ。ウチの親父はいいとして、お袋ははいかに楽しんで事を終わらせるかを考えてるからな」

「へえ。あ、じゃあそろそろか」

何かと思えば、もう教室に到着していた。

「死なないようにね。じゃっ！」

樋口はそう言い残して、教室に入らず俺から走り去ってしまった。

何事かと思えば

『源オオオオオツ!!』

一斉に後ろにいた男共が俺の名前を呼んだ。

振り返れば、見覚えのある顔たちが俺に襲いかかってくる。

その表情は皆怒りに満ちていた。

もしかして怒りの対象は俺？

そしてこれを見越して樋口は逃げた？

「あんのヤロオオオオオツ!!」

なんでそんな重要なことを言わないんだ。

俺は気の利かない同級生に怒りを抱きながら、自己防衛のために休み時間中逃げまくった。

第三話 『二人に繋がりがありません』（後書き）

深鳥「三話です。更新遅くなってすみません」

深鳥「今回俺ら結構喋ったな」

深「……メタ発言していい？」

深「何？」

深「これじゃどっちがどっちだか分かんないわよ」

深「口調で分かんない？」

深「というか深鳥は一人でいい」

深「それを俺に言われてもな。両親に言え」

深「だからじゃんけんで勝った方が深鳥を名乗ることにしよう」

深「別にいいけどな」

深「じゃあ行くわよ。ジャンケンポン」

深「あ、勝った」

樋「なんでええええええ！？」

深「お前が決めたんだろ」

樋「私主人公よ！？普通ここで私が深鳥を名乗るべきでしょ！？」

深「お前が言ったんだから文句言っな」

樋「ブー」

深「じゃあここまで見てくれてありがとうございます。感想待ってます」

第四話 『体力には自信ありません』

授業が終わって放課後、隣に座っている源君に話かける。

「源君この土地勘は？」

「ここに来たのは……九時間前だ」

「話せる人は？」

「まだいない」

私はひとつ溜息をついた。

「私部活なの。先生か誰かに聞くか、私を待つか」

「待つ」

「即答なのね」

「一人は寂しいっての」

「んな女々しいことを。女の子紹介しようか？てかさせて。私死にたくない」

「何が死に繋がるんだよ」

ふざけた表情は見られず、本気で言ってるということが見受けられる。

私は源君を指さす。

「あんた気づいてないかもしれないけど、女から見たらめっちゃイケメンなの。分かる？」

「……は？俺が？」

この態度から、やっぱり気付いて無かったようだ。

「そーよ。で、しかもウチのクラスは殆ど嫉妬深い。リア充が現れたら怒り狂って襲ってくるの。経験ない？」

「……昼休みか」

「正解。あんなのに追いかけられたくないわ」

「それは同感だな。ん〜、じゃあもしかして吉祥ヶ島が言ったことってお世辞じゃなかったのか？」

「それは、私にその話について詳しく聞いてほしいの？」

「なんで分かるんだか。あいつにさ、朝人気の無いところに連れてかれて、端正な顔って言われたんだよな」

「ああ、あの時か。あの子面食いよ。結構男と付き合ってたし」

「へえ。詳しいな」

「何度か相談受けたからね。でも、火乃己さんね……。うん」

決めた。

こうすれば私に被害はない。

教室内を見渡せば、火乃己さんと目が合った。

どうやらずっとこっちを見てたようだ。

ちよいちよい、と手招きする。

「なんですの？」

「源君、とある事情で放課後時間潰さなきゃならんよ。部活案内でもしてやってくんない？」

「分かりましたわっ！」

うん、いい返事だ。

これで嫉妬の対象は全部火乃己さんにいった

「ちよつと待てよ」

と思ったら止めに入る源君。

「樋口、俺お前んちに行かなきゃなんねえんだろ？なら一緒にいた方がいいだろ？」

グサグサ。

女たちの負の視線が刃物となって私の体を突き刺してくる。

ここまで痛い視線は初めてかもしれない。

てか私必要以上に仲のいい男子は少なくしてきたのに。

「深鳥さん？どういうことですか？」

女子を代表して火乃己さんが聞いてくる。

「ここは……ヘタに隠してもいつかバレたときにつらいから本当のこと話そう。」

「これは予想なんだけど、ウチの両親と源君の両親が知り合いらしくて、源君の両親が私のウチに来てって言われてるらしいの」

「へえ、なるほど。で？どうして一緒にいなければなりませんの？」

ズイツと詰め寄ってきた。

どうして私がこんな恐怖に耐えねばならない。

そんな理不尽を心の中で訴えた。

しかし当然だが、聞き入れてくれる人は誰もいない。

それどころか私をより深い嫉妬の嵐に背を押す人が現れる。

「どうしてって。俺、樋口のこと好きだし」

ゴリゴリゴリゴリ

私の体が視線によって削られていく。

これは絶対誤解だ。

この男のことだ、好きは好きでも友人として好きっていう意味だ。
でもそこは関係ない。

何をどう言い訳しても、源君　いや、ムカつくから君付けもやめよう。

源のこん畜生が私のことを好きと言った事実には変わらない。

この事実がある限り、この場にいる女たちは私に怒りをぶつけてくるだろう。

だったらやることはひとつ。

ガシッと自分の荷物を掴み、廊下に向かって走り出す。

いきなりの私の動きだったために皆まだ動けずにいる。

「源！」

それだけ叫んで、私は一度も振り返ることなく廊下に出て昇降口に向かった。

後ろから足音が聞こえる。

「樋口！どこ行くんだよ！？」

予想通り源が追いかけて隣に来た。

流石は男子。

こんなすぐ追いつかれてしまった。

「部活サボって帰る！死にたくない！」

私は端的に説明した。

「サボるって、それでいいのかよ？」

サボる元凶作った本人が言うんじゃないよ。

そんなツツコミをしたかったが、そんな暇はない。

『待てエエエエッ！！』

後ろから、我に返った二年B組の生徒たちが襲ってくる。
しかも女子だけじゃなく男子も混じってる。
私に告白した源を潰そうとしてるんだろう。

「源！あんた私の荷物持って走れ！」

邪魔になってきた荷物を源に押しつける。

男なんだからこのくらい何の障害にもならないだろう。

「いいけど、急に呼び捨てになっただな」

「あんたに君をつけるのがバカバカしくなった」

「まあいいけど」

階段をジャンプして飛び降りて時間短縮する。

足が重くなるけどそうも言ってもらえない。

どうしてもつと鍛えなかつたのかと後悔しながらも、昇降口という第一関門に到着した。

まだ誰も刺客はいない。

急いで靴を履き替え、外に出る。

道が平坦になつた為、同じ部活の裕子にサボることを伝える。

「祐子？悪いけど部活欠席伝えといて！ちょっと今どうしようもない状況だから」

『はいはい、大丈夫だよ。分かってる分かってる』

流石は我が友人。

理解が早くて助かる。

「『だって、今日の前にいるし』」

急に祐子の声が重なった。

ひとは携帯から電子音。

ひとは前方から肉声。

学校の門の陰から二つの陰。

裕子とニアだ。

「この裏切り者!！」

『何言ってるの? 私も一応B組よ? そりゃこうなるでしょ。抜け駆けしちゃうってさ』

『ワタシハ裕子ニタノシイコトアルツテ聞イタ。ダカライルヨ』

電話越しに二人がここにいる理由を聞いた。

ニアはかろづじて敵じゃないようなのでよかった。

後の問題は裕子か。

裕子をどうにかしないと、源はいいとして私が抜けない。

どうしようか。

携帯を閉じながら頭をフル回転させるが、いかんせん時間も残り少ない。

まだ後ろから追っ手が迫ってきてるからだ。

「おい樋口、どうするんだ?」

源も危機を感じてきたようで、口調から焦っていることが伺える。

「ちょっと待って、今考え」

あ、閃いた。

「源!」

「な、なんだ？」

「小金井祐子の第一印象は！？本人に聞こえる声で！」

「な、なんで？」

「いいから！」

私の叫びが聞いたのだらう、覚悟を決めたよううで息を吸う。

「明るくて優しくて可愛い子！！」

「か、かか、可愛い……？」

声はかるうじて聞こえたが、表情はよく見えない。でも真っ赤になってることは容易に想像出来た。

これで後一押し。

「女子の皆！小金井祐子が源君に色目使ってるわ！ここで私を止めて源君にいい格好を見せようとしてる気よ！！」

『な、なんだつてええええええッ！？』

よし、この反応ならいける。

「祐子！あなたにいい思いなんてさせないわ！！潰してやるっ！！」

『おおっ……』

「え、え？何？何々？」

突然の殺気に我を取り戻した祐子。

その間に少し回って距離を取りながら祐子の脇を通る。

そして一言。

「じゃあね、裏切り者の祐子ちゃん」

一拍の間呆け、意味を理解したようで。

「みどりいいいいいんツ！！」

『小金井祐子オオオオ！！』

私に怒りをぶつけようとした祐子だが、ウチのクラスが殺到しているため不可能となった。

「ニア〜！気をつけてね〜」

私の敵にならなかつたニアに言葉をかけてあげる。

まあニアに何かする理由がないから平気だと思っけど。

「ワイ！シューダンオニゴツコダー！ニゲテヤル〜！！」

どうやら私が心配するまでもなさそうだ。

学校を出て、しばらくは知ったところで足を止めた。

流石に教室からここまでのほぼ全力疾走はキツイものがあった。

電柱に手を付けて体重をかけた。
自分で立つてるよりはマシだ。

「大丈夫か？」

「無理」

「即答かい。意地見せようとかないの？」

「私はか弱い女の子だからいらないの」

軽口を叩くが、これこそが意地を張っている。
ホントは喋りたくないほど酸素が必要だし、倒れなくなるほど足が重い。

それに対して、流石男子。

汗はかいてるものの、息は乱れていない。
体動かすの好きって言ってたから慣れてるんだろっ。

「にしても、なんで小金井は俺たち捕まえなかったんだ？それに追っ手ももういないし」

確信した。

やっぱりこいつ乙女心知らない。
それでモテるとか、女泣かせね。

そう思いながら、説明してあげる。

「あれよ。ウチのクラスはバカだから何かきつかけ与えればすぐにそっちに駆けつけちゃうのよ。あと、女は男に可愛いって言われりや嬉しくなるもんなの」

「へえ。俺なんかで嬉しくなるのか」

「なんかって……。こりゃ男も逆に嫉妬するわ」

「なんで？」

聞いてくる源に私はビシツと勢いよく言った。

「どっかの偉い人はこんなことを言った気がするわ！恋愛関係について他人に聞くな、と！」

「なんか曖昧だな。で、結局意味分らないんだけど」

「つまり、客観的に見てる分ならいいけど、主観的になった場合は誰が誰のことを好きなのか、ということを知りゃいけないの」

「何故に？」

「自分で気づかなきゃ意味ないからよ。私も相談受けるけどヒントしか言わないし」

偉い人が本当に言ったかどうかは分からないが、私はそう思う。自分のことは自分でやれと言うことだ。

「ん〜……、まあよく分からんけど、取り敢えず自分で気付けるように頑張ります」

「はいはい。じゃあ行きますか」

私たちは、今度は歩きながら私の家に向かった。

「樋口ってさ、何人暮らし？」

「三よ」

「にしてはデカくね？」

家を見た感想がそれだった。

それには私も同意する。
部屋なんて余ってるし。

「因みにデカイ理由は私も知らないわ」

「そうか。でもこれなら三人お邪魔しても全然平気そうだな」

「そうね。じゃ、早速入るっか」

敷地内に入り、玄関のドアノブに手をかけた。

「ただいま〜」

「お邪魔します」

入って早々私は玄関の靴を見た。

知らないものが二足。

どうやら既に源の両親は中にいるらしい。

「お帰り、深鳥」

わざわざ出迎えてくれたのは、我が父の樋口夕馬。

決定ね。

「リビングには行かないから、自分の部屋でくつろいでる。終わったら呼んで」

「あ、やっぱりバレてた？」

「源の名前言わなきゃ分かんなかったかもね」

「いや、思わずね。深鳥君いらっしやい」

お父さんは後ろでばーっとしてる源に挨拶をする。

「あ、はい。お邪魔します」

「じゃ、源。二階行くよ」

「お、おう」

私たちは靴を脱ぎ、お父さんの脇を通った。

階段上がるうとしたとき、お父さんに呼び止められた。

「今日は部活サボりかい？」

これを聞いてくる、ってことは、私の部活が終わって帰宅する頃に準備が整う予定だったのだろう。悪いことをしてしまった。

「色々あったのよ」

それだけ言って、今度こそ二階に行った。

私は自分の部屋に入る前に、源を廊下に待たせてお母さんの部屋に入った。

座布団を借りるためだ。

二つ抱えるように持って、自分の部屋で荷物を下ろす。

「へえ、これがお前の部屋か」

「悪かったわね、女の子らしいものがなくて」

私の部屋はシンプルだ。

勉強机があつて小さいテレビがあつてベッドがあつてクローゼットがあつて棚があつて、ぐらいだ。

ぬいぐるみなんてないし、カーテンもフリルのついた可愛らしいも

のでもなんでもなく、黄緑一色だ。

「別に謝らなくてもいいだろ。それにしても、やっぱりお前の部屋だな。すげえいい匂いがする」

「おくびもなく言っな」

こういうストレートな発言がモテる秘訣なのだろうか。

「ところで、樋口ってあの人と仲悪いの？」

あの人、とはお父さんのことだろう。

「別に普通よ。ただ私家では基本無口なの」

「……マジで？想像つかないんだけど」

やっぱり初対面には私明るくて社交性がある奴って思われているよ
うだ。

「でもなんでキャラ変えんの？あ、事情があるなら言わなくていい
けどさ」

「んな大層なものじゃないわよ。単に恥ずかしいだけよ」

「親と話すのが？」

「まあね。ま、思春期だからじゃないの？」

「……お前が気にしてないなら口出さないけどさ」

「分かってるじゃん。で、時間潰し。ゲームでもやる？」

私はテレビを指さして訊ねる。

「OK」

ということで私たちは呼ばれるまでずっとゲームして遊んでいた。

第五話 『何その報告おかしくない?』

「深鳥〜!降りてきて〜」

下からお母さんの呼ぶ声が聞こえた。

「なあ、名前どっちの方呼んだと思う?」

「私に決まってんでしょ」

私たちはゲームを消し、一階へ向かう。

「で、樋口」

「ん?」

「ホントにやっていいの?冗談のつもりだったんだけど」

「構わないわよ。まあお父さんは騙せないだろうけど、お母さんの反応見てみたいしね」

「まあ俺も見てみたいな」

一階に到着、一度深呼吸して扉をあける。

パンツ、パンパンツ!

中に入れば、お父さんとお母さん、知らない人二人ががクラッカーを鳴らしていた。

源の両親だろう。

どうやら源はお父さん似のようでイケメンだ。

「ようこそ樋口家へ、源深鳥君」

お父さんが源を出迎える。

私は源の腕に抱きついた。

「みんなありがとっ。深鳥君を認めてくれて」

「「「え?」「」」

案の定お父さん以外が驚きの声を上げた。

「私たち今日であっただけど、もうお互い一目惚れでっ」

「ああ。しかも名前も同じだし両親も仲がいいときた。もう運命的な繋がりを感じたな」

「だよな」

「つーわけで親父、お袋。俺深鳥と結婚前提に付き合っことになったから」

「お父さんもお母さんも認めてくれるよね?」

「「「.....エエエエエエッ!?!」「」」

先ほどと同じ三人が叫ぶ。

うん、ここまでお母さんが驚いたのは初めてだ。

相も変わらずな無表情なお父さん　　って、えっ!?

「ちょ、ねえ源!ねえねえ!」

「あ?どうした?てかもう終わっていいのか?」

「ねえ見てよっ!お父さんがさ!」

「な、何?お父さんがどうした?変わりないみたいだけど」

「はあっ!?!何言ってるの!?!こんな驚いてる顔してるのに何が変
わりないよ!?!」

私は源を怒鳴りつける。

こいつ目が悪いのだろうか。

「済まん樋口。俺はバカなようだから分かりやすく教えてくれて」

何こいつ、教えて貰わなきゃ分からない程バカなの?

「お父さんがこんなに驚くなんてあり得ないじゃないっ!?!」

「初対面で分かるかアッ!?!」

私の言葉に、怒りを含めて返してきた源。

いや、こんなに怒りを含める意味が分からない。

「だってこんなにもお父さんが驚愕っ！っていう顔してるのよ！？初対面でもその違いに驚くでしょ！？」

「いやいやいやいや！どこが！？どこが驚愕の表情！？どっからどう見ても無表情じゃ」

「お、おい夕馬！お前大丈夫か！？」

「いや、そりゃ娘に彼氏が出来たらシヨックかもしれないけど、ほら！元気だして夕馬！！」

「夕馬君っ！深鳥に好きな人出来たんだから、祝ってあげようよ！確かに驚いたけど！」

恐らく源家でも、あんな驚愕したお父さんを見るのは久しぶりか、初めてなんだろう。

人のことはいえないけど、ものすごい取り乱しようだ。

「ちょっと待て！！なんだ親父もお袋も！！俺だけか！？俺だけがあの人無表情に見えるのは！？なんか物凄い疎外感！！」

「源、あんたもまだまだね」

「だから俺はまだ二回しかこの人と会ったことねえんだってばアアアッ！！！」

そして場に鎮静が戻ったのか、その十分後だった。

「いや、お見苦しいところをお見せしました」

ぺこりと頭を下げるお父さん。

「いや、むしろ夕馬さんが一番見苦しくなかったんですが……」

「まだ言うかあんたは」

お父さんのあの表情をまだ認めない源。

そろそろ現実を見てほしいところだ。

「じゃあとりま自己紹介でもしましょうか」

源のお母さんがマイク代わりだろう、どこからか持ってきたしゃもじを手に行っている。

「わたしは源千佳音。お隣の快斗君の妻で、夕馬君の愛人やってます」

「はあああっ!?!?」「」

私と源は声を揃えて驚きをあげた。

そりゃ互いの両親にそんなスキャンダルがあれば、意味を理解できる子供は驚くだろう。

「あ、二人とも。千佳音ちゃん言うことの八割は嘘だから気にしないでね。後夕馬君は私しか見てないから、浮気とかそういうのは絶対ないから」

私たちの誤解を解こうと、お母さんが本当のことを説明してくれた。それを聞いて、源の母千佳音さんは『ちよいと言い過ぎじゃない？』と嘆いていた。

あ、そういえば源に言うの忘れてた。

「源、ちよい」

私たちは両親たちに背を向け、顔を近づけた。

四人に聞こえないように内緒話を始める。

「うちの両親に『仲いいね』とか言わないでよ。話が年寄り並みに長いから」

「わ、分かった……」

「あつるえ〜、深鳥やつぱ深鳥ちゃんと仲いいね〜。やつぱ付き合ってるんじゃないの〜?」

千佳音さんが若者張りのテンションで源をからかってくる。

「あ、樋口。あれは俺の一個上の姉とか思えばいいから。タメ口でかまわん」

「おおいいぜ！わたしはまだまだ若くいけるさ！」

グツと親指を立ててきた。

うん、お母さんと違って友達感覚でいけそうだ。
ちなみにお母さんは姉だ。

「じゃあ続けるよ。仕事は夢を追いかけること」

夢……？

一瞬意味を考えてしまったけど、今の千佳音さんを思えばすぐ分かった。

「は？何言ってるの？」

息子だというのに分からないようだ。

「簡単よ。無職って意味」

「ちょ！深鳥ちゃん！！人がせつかくかっこよく言ったのに！！」

「いや、アホ臭さ全回だったからな？」

隣にいる源のお父さん、快斗さんがツッコむ。

私も快斗さんに同意見だ。

「深鳥、正確に言うと？」

お父さんが私に先を促した。
なんか試されたりしてるのかな？

「正確も何も、源曰く今日来たばっかなんでしょ？前の仕事先やめてこつちで新しく仕事探すんじゃないの？千佳音さんの印象からして事務仕事よりはパートって感じで、そうなるならきつとこつちの地理に詳しいお父さんとお母さんに相談する。お母さんはお父さんに意見委ねるから、千佳音さんはスーパー牡丹のパートをやるうとしてる。とかなんとかべらべら喋ったけど、間違ってたらごめんなさい」

ホント長い説明をしてしまった。

お父さんならもつと手短にまとめられるんだろうな、とか思いながら、私はまだ中学生なため語彙が少ないのだ、という言い訳を考えてみた。

すると、お父さん以外皆驚いていた。

まあお母さんは三人ほどじゃなかったけど。

「いやあ、こりゃ驚いた。夕馬二世がいるよ」

「お袋。元から二世だ」

「ホント親子揃ってどんな思考してんだか……」

源家総出で感想を述べる。

「お見事。正解だよ」

「ありがとう」

私は一言だけお礼を言っておく。

「ていうか千佳音ちゃん。なんかすごい脱線してるよ。ちゃんと真面目にやるつよ」

「いや、今回脱線したのは深鳥でしょ？」

お母さんが話を戻そうとするけど、千佳音さんは源に責任を押しつける。

私も千佳音さんのせいだと思っただが。

「あんたが変な仕事言うからだろ」

「ちょっと、親にあんたとか信じらんないっ。誰が育てたのよ？」

「あんただあんた。それから少し前に、俺の一個上の姉でいいって言っただじゃん」

「そうだけど！でも若いお母さんがいいの！二十代前半くらいの！」

「アホ！どこの世界に中二の子供持った母親がいんだ！？せめて二十八年くらいにしとけ！」

トントン

私は源の肩を軽く叩いた。

「ん？何？」

私はある方向を指さした。

源はそれを目線で辿る。

そこには見た目二十代前半の我が母、樋口穂菜がいる。

「いや、気になってたんだけどさ、その、女性にこれ聞くのも失礼ですが、おいくつでしょうか？」

「今年で三十六だよ」

「ってーとなんですか？樋口の母親は家の阿呆と同年なんですか？」

「誰が阿呆よ」

「うん。中学から皆おんなじだよ。大学は違っただけ」

「はっきり言って僕たちじゃ快斗たちの学力に付いていけないから」

お？

ということはこの二人実は頭がいい？

快斗さんはともかく千佳音さんも？

思わず千佳音さんを見つめてしまった。

それに気付いた千佳音さんは私にジト目で返した。

「ちょっと深鳥ちゃん？あんだ今『えー、こんな馬鹿面な千佳音さんが頭いいのー？』って思ったでしょ？」

「はい、思いました」

「素直に言っなー！！」

どうやら私の解答はお気に召さなかったようだ。

だったら怒られないように、もしかしたら分かりそうなネタを振ってみますか。

「だってこれ以上脱線しちゃったらお母様の料理食べさせられちゃうんだもん」

「趣味はゲームや漫画で、暇なときは深鳥と一緒にゲームしたりします。はい、次快斗ね」

すごく冷静に、自分の自己紹介を終えた。
ようだ。

ちなみにあれは嘘。

ちらりと横目でお母さんを見れば、グスンと涙目になっていた。
やはりというか当然というか、お母さんは子供の頃から料理はダメ

なようだ。

続いて快斗さんの自己紹介。

「えっと、俺は普通にいくな。源快斗だ。千佳音の夫で、深鳥の父親をやってる。仕事はファミレスの一応店長をやらして貰ってて、嬉しいことにこの近くの店に変更して貰えたから、誰かさんとは違って無職じゃない」

最後の言葉で、『うわーんっ！快斗がいぢめるー！』と嘆くものが一人。

で、私も気になる事がひとつ。

「ねえお父さん、店長って仕事そんな都合よくこの近くに転勤できるものなの？」

店長だからこそ不動ってイメージがあるんだけど。

「快斗の顔を見れば分かる、っていえば想像できる？」

言われたので快斗さんの顔を見してみる。

うん、超が付くほどイケメンだ。

きっと今の源同様かなりモテるのだろう。

そう考え、ひとつの仮定が生まれた。

まさかお偉いさんが女性で、快斗さんの魅力に当てられて望みが叶ったとも言っのだろうか。

そんなマンガっぽい話がありえるのなら、快斗さんは主人公的立場なのだろうか。

後でお父さんに答え合わせして貰おう。

「最近の仕事が忙しくて帰りが遅くなることが多々あるな。だから趣味らしい趣味は持っていないが、暇なときは家事の手伝いとかはするな。たまに三人でゲームしたり程度か。まあやり込みは流石に出来ないけどさ」

「よく言うよ。ゲームあんまやらないのに俺たちといい勝負出来てんだから」

源は嫉妬を含めた言葉を快斗さんにぶつける。

子供ながらのプライドが、自分と互角の技能を持っている父親を許さないらしい。

子供って言っても私と同じ年だけど。

「まあ、短いけどこんなもんでいつか。ほいよ」

次に渡るのはお父さん。

「樋口夕馬です。隣の穂菜とは夫婦関係で、快斗と千佳音とは小さい頃からの幼なじみで、家族ぐるみの付き合いをしてました。趣味は……深鳥に作ってあげてるからお菓子作りかな。仕事はさつき深鳥が言ったスーパールの正社員です。はい、穂菜」

お父さんからお母さんにしゃもじが回る。

その間に、ええ〜って思う台詞を源が吐いた。

「え、親父とお袋って幼なじみなの？」

おいおい、両親のことですよ。

それくらい知っとけよ。

「あり？そついや言っただけ？」

「高校から付き合った、とは聞いたけどさ」

どうやらお互いに情報の齟齬があったようだ。

別に問題があるわけじゃなさそうだけど。

「じゃあ私いきます。樋口穂菜、三十六歳。好きなものは夕馬君っ！趣味は……なんだろうな。あ、テトリス好きです。基本的に家じや家事をやっけて、専業主婦兼小説家です」

お母さんが自己紹介をするのは初めて聞くけど、小説家なんだから別に専業主婦というわけではない気がする。確かに家にずっといるけど。

「穂菜ちゃんや、小説書いてんだから専業ではないのではなからるか？」

やっぱりそう感じたのは私だけではないようだ。

「だって昼間に家事とかしてるよ？」

「なら兼業主婦なんじゃないんですか？」

源が的確そうな単語を述べた。

兼業主婦なんて単語あるんだ。

専業主婦しか知らなかった。

「深鳥のが正しいな。というわけで穂菜訂正」

「はあい。仕事は兼業主婦と小説家です。よろしくお願いします」

ぺこりと律儀に頭を下げた。

そして次は私の番。

特に面白いことがあるわけじゃないので、さっさと終わらす。

「樋口深鳥です。趣味は食事と人間観察。学校じゃ勝手に生徒相談役に任命されてます。以上」

？はいつ？と隣にしゃもじを回す。

ようやく最後に源だ、と思ったが、そうではないらしい。

「え、何？深鳥ちゃん相談役なんてやってるのっ？」

学校で生徒が相談役なんて聞かないから珍しがってるのだろう、千佳音さんが聞いてくる。

「そういう役割があるわけじゃないんですけど、なんか友達の相談

受けて解決したらそれが広がりました。いつの間にかそんなこと言われるようになってきました」

「そっか、やっぱり血は争えないか」

快斗さんは、何か面白いようでニヤニヤしている。

その様子を見るに、お父さんも相談を請け負っているようだ。

なんたる偶然。

別に私が作りたかったわけでもなかったのに。

「親父、どういうこと？」

「夕馬も昔、そんな風に相談請け負ってたんだよ。恋愛がらみが多かったようだけど」

予想は当たってたが、恋愛がらみか。

お父さんとお母さんを見て分かるように、二人の愛は異常だから参考になるような事が言えたのかどうか、はなはだ疑問に思ったが、わざわざ生徒が相談に来たんだから多分言えたんだろう。

「じゃあ最後やらせてもらいます。源深鳥、十四歳。樋口のクラスに転校してきました。勉強よりは体を動かす方が好きです。趣味はゲーム。オセロが得意です。これで終わります」

「さあって皆の自己紹介が終わったと言うことで、報告があります」

突如源の持つてるしゃもじをかつぱらい、しゃべり始めた千佳音さ

ん。

何を言っただろうかと思っ

「今日からこの六人が家族です！」

「はい？」

ほんとに何を言ってるんだろうか。

第五話 『何その報告おかしくない?』 (後書き)

樋口深鳥「なんか前回後書き書かずにすみません。確か急いでたか眠かったかで書かなかった気がします」

夕馬「でも今回も、とある事情で後書き短めです」

樋「というのも、現在作者頭痛らしくて、今すぐ寝たいらしいです」

夕「というわけですので、colorfulさん感想ありがとうございます」

樋「というかどうして私は深鳥じゃなく樋口で記載されてるのよ」

第六話 『ご飯は皆で食べましょー』

「お、お袋？お前何言ってるの？」

「親に対してお前とか言うな」

驚愕の表情を浮かべながら聞く源の頭を、千佳音さんはしゃもじで叩いた。

そんなことは気にせず、源はさらに聞く。

「家族ってどういう意味だよ？ちゃんと説明しろ！」

「だから、言葉通りだって。家族家族。今日からわたしたち源家は、樋口家と一緒に暮らすの」

「なんで！？俺らの家は！？」

説明されても食い下がる源。

気持ちは分からなくもない。

どうしてこんな思春期の乙女がいるのに、思春期の野郎と一緒に暮らさなければならぬのだろうか。

「お母さん。今日なんの日？」

「え？いきなりどうしたの？」

「このタイミングで、どうして源家と一緒に住むのかわかって考えた

の。普通に源のこと考えれば、学期ごとの節目にこっちにきた方が、何かと気持ちの切り替えとかしやすいでしょ？それなのにこんな中途半端な時期にこっちに来るなんて。なんかの記念日？」

私の問いに、キョトンと不思議そうな顔をするお母さん。

「あれ？夕馬君、深鳥に記念日のこと話してなかったっけ？」

「ん〜、話したつもりだったんだけど、本当に知らない？」

「知らない」

知ってたらこんなことは聞かないで自分で導き出している。

「今日は僕たちの結婚記念日なんだよ。毎年快斗たちからはプレゼントもらってたね」

そういえば去年の今頃、ちよろつとプレゼントらしきものを見た気がする。

なるほど、少し読めた。

「つまり、今回のプレゼントは源家ということ？」

「そーいうこと。流石深鳥ちゃん」

ビシッと千佳音さんが持つしゃもじでさされた。

これが正しいということとは、もう少し考えられる。

「お母さん、お父さん。これ、かなり昔から決めてたでしょ？十年以上前から」

「えっ！？深鳥なんで分かったの！？驚かそうとしてたのに……」

少し落ち込むお母さんを見て、少し悪い気がした。

でもまあ驚かされても、私は演技なんて出来ないから、私が驚いてないっていうのはすぐにバレるだろう。

「普通にこの家、六人暮らししてちよつと狭い程度の広さじゃん。三人にしては大きい。で、覚えてる限りじゃ幼稚園からこの家にいたから、これを買った十年以上前から、このメンバーで住もうと思ってた。でも、快斗さんたちの仕事の都合上、最初から一緒に暮らせなくて、この時期に暮らし始める、ってところ？」

この解答にはちよつと自信があつた。

しかし

「うん、ほぼ合ってるよ」

実際とは微妙のズレがあるとお父さんから教えられた。

「え〜。何処間違つてた？」

「この家は四人暮らしを想定して買ったんだよ」

なるほど。

私たちが生まれる前からプランを立てていたのか。確かに四人ならちよつといいくらいの家だ。

「それと、今まで一緒に暮らさなかったのは仕事じゃないんだ」

「じゃあ何？」

「小さい頃から一緒にいすぎると、恋愛感情が抱きにくいとか言い出した千佳音のせい」

「はあ！？」

お父さんが千佳音さんを指さしたので、私は睨みつけた。

千佳音さんはVサインなんかしている。

？気が利くでしょわたし？とか言いたそうな表情をしている。

「えっと、何？じゃあ親たちは私と源にくっつけと言ってるの？くっついて、私たちを同姓同名にしたいの？」

「したいです！」

「そういうわけじゃないぞ」

「深鳥の好きにしていよ」

「私も夕馬君と同じだよ」

べっぴんやら千佳音さんのみらしい。

後は好きにやってくれと、そう言ってる。

じゃあ取り敢えず。

「源」

「ん？」

「千佳音さん殴っていい？」

「はいっ！？」

「ああ。つかむしろ俺も殴る」

「ちよっとちよっと深鳥ーズ？なんで怒ってるの？」

「やかましい！勝手に俺の好きな奴決めるな！」

「そういうことです。まあ好きな人は今んところいないけど」

でもどうして源に恋愛感情を抱かなきゃならんのだ。

確かに源かっこいいし気も利くけど、何故か苦勞しそうな気がする。ため息をつくところが頭を過ぎる。

「でも、今んところわたしたちの親も幼なじみ同士で結婚して、次のわたしたちも親友同士で結婚したんだよ？流れるに次は深鳥ーズが結婚するでしょ」

「いや、幼なじみじゃないってところで流れ断ち切れてますよ。てか流れに沿いたかったら、別々に暮らす意味なかったじゃないですか。小さい頃から一緒にいて、ちゃんと恋愛成就してるんですから」

私のツッコミに、千佳音さんは悲しげな表情を浮かべた。

「快斗お！義理の娘がいじめるよお！」

そして隣に座る快斗さんの腕にしがみつく。

「よしよし。今回は千佳音が悪い」

「なんですと!?!」

バツと快斗さんから離れた。

「まあこの問題に善悪はないけど、穴だらけの考えしか持ってなかったお前の自業自得だ」

正論を言われた千佳音さんは唸りをあげるが、それ以上誰も言わなかった。

「そつえば?と、源が何かを思い出したかのように、快斗さんに質問した。

「親父。なんで俺ら名前が同じなの?偶然なわけねえよな?」

「それか。ネタだ」

「フンツ!!!」

千佳音さんの持つしゃもじを奪い取り、それを快斗さんに向けて投げつけた。

「イタツ！？深鳥何すんだっ？」

「何じゃねえよ！息子の名前ネタで決めてんじゃねえよ！！」

源が不憫に思えてき ちよつと待て。

「ねえ、まさか、私もネタ？」

両親を見ながら聞いてみる。

「深鳥は違うよ。結構前から、男の子でも女の子でも深鳥って名前付けようとしてたの」

私は何をしても深鳥は確定していたようだ。

次に、お母さんから引き継いでお父さんが説明する。

「で、深鳥が生まれるちよつと前に、快斗たちの子供が男の子って分かったから、どんな名前がいいか聞きにきたの」

「なるほどね。お父さんたちは男でも鳥って決めてたから、それを教えた、と」

「そういうこと。千佳音が『だったらおんなじ名前にしよう』っていいだして」

「お前が元凶か！」

ドスツと脳天にチヨップを食らわす源。

その相手はもちろん千佳音さん。

「ちよ、深鳥！ドメスティックバイオレンスはダメよ！」

「やかましい！」

「ねえ源」

私は隣にいる服を掴む。

「あ？」

「ドメスティックなんちゃらって何？」

私の知らない単語が出てきたので聞いてみた。

「ドメスティックバイオレンスな。ドメスティックが家庭内、バイオレンスが暴力。合わせて家庭内暴力」

「なるほど。ウチとは無縁の台詞ね」

「喧嘩しないの？そっちは」

「喧嘩どころか、声を荒らげることすらしないわよ。毎朝毎晩イヤイチャイチャイチャ。付き合わされるこっちの身にもなれっもんよ」

「ええ、深鳥。私たちイチャイチャしてないよ？ね、夕馬君」

「うん、してないよ」

「いやいや、いつもいつも二人の世界に入ってるじゃん。あれをイチャイチャと言わないでなんて言うのよ」

私が抗議していると、快斗さんに名前を呼ばれた。

「深鳥ちゃん」

「なんですか？」

「その程度、二人にとってはイチャイチャとは言わないんだよ」

「……はい？」

「こいつらは、部屋の中ではいつもいつも抱き合ってキスして、一日に三回以上は愛の言葉を互いに語り合うのが通常営業なんだ。ここまで言えば分かるかな？」

「……ちょっと待ってください。じゃあなんですか？今まで見てたのって、通常以下のやり取りってことですか？」

「そういうことだ」

私は二人を見る。

お父さんは無表情。

お母さんもいつも通りのにこやかな顔。

「この人たち、愛情に関しては異常過ぎだから気をつけてね」

若干げんなりした状態で、千佳音さんは言った。
多分学生時代とかに苦労したのだろう。

「千佳音ちゃん、何処が異常なの？そろそろ教えてよ」

あれだけ言われても異常性に気付いてないとか、本当にウチの母はダメかもしれない。

その点ウチの父は確信犯だろう。

もし天然だったら、今まで私が見てきた以上のイチャイチャっぷりを見せつけられてたところだろう。

あ、そうだ。

「千佳音さん、快斗さん」

「どうしたの？」

「もし目の前でイチャイチャされたら、どう対処すればいいんですか？」

これはぜひ聞きたかった。

私の解決方法は、早くその場から立ち去るということしかなかったからだ。

千佳音さんが、口を開く。

「どうしようも出来ないわ」

「は？」

「こいつらがイチヤイチャし始めたら、何しても話を聞かないで二人の世界に入るから、いち早く立ち去ることがおすすすめよ」

「でも、深鳥ちゃんに見せてるレベルなら、精神がイカれるまではいかないから、まだ平気だよ」

「二人ともボロクソ言ってくれるね」

お父さんが言うが、多分源家の方々が言うことは正しい気がする。誇張なんて全くないだろう。

「なんか、ウチの両親の方がやばいって思ってたけど、樋口んとも相当だな」

隣で苦笑しながらいう源。

どうやらウチの家族はまともだと思ってたらしい。

「さて、じゃあキリもいいし、そろそろおなかも空いてきた頃だからご飯食べますか？」

千佳音の言葉に賛成して、私たちは夕食へとありつく。

「うわっ、めっちゃうまそ」

料理を見て、真っ先につぶやいた。

今までお父さんが作った中で一番美味しそうな料理じゃないだろう

か。

それにリクエストしたハンバーグもある。

「これ夕馬さんが作ったんすか？お袋とはえらい違い」

「違つよ」

「へ？」

私たちは間抜けな声を出してしまった。

これはお父さんが作ったものじゃない。

なら誰が作った？

「これ作ったのは俺だ。まあ夕馬に手伝ってはもらったが」

へえ、快斗さん料理上手なんだ。

まあファミレスの店長とか言ってたから、料理が出来ないというわけではないのか。

「おいお袋」

すると源が、少し声を低めにつぶやく。

「俺、親父は飯作れねえって聞いたんだが？」

若干体を強ばらせ、冷や汗を流す千佳音さん。

源に嘘をついていたのだろうか。

「いや、だってさ、快斗めっちゃ料理うまいから、それ言うと快斗の料理食べたい言いそうだったからさ。快斗忙しいし、それ知らなきゃ深鳥もわたしの料理で我慢できると思って」

はあ、と源はため息。

「気にしすぎだ。別に忙しい親父に鞭打って飯は作らせねえよ。お袋の飯も充分旨いし」

「深鳥……。ありがとう」

こんな暖かな家族を着に、美味しそうな料理を食べる私たち樋口家と源家だった。

第六話 『ご飯は皆で食べましょっ』(後書き)

深鳥「一ヶ月ぶりの投稿ね」

穂菜「しょうがないよ。これは別作品の更新が止まったから始めたやつだから。それにその作品は更新再会しちゃったし」

深「つまりこのアホ作者は、課題てんこ盛りな状況で四つも更新してるわけね」

穂「そうなるね」

深「ちゃんと終わるのかしら？」

穂「ん〜、どうかな〜。でも頑張ってくれるよきつと」

深「頑張ってもらわなきゃいけないんだけどね」

穂「ではそろそろ後書きも終了させてもらいます」

深「STさん、colorfulさん、感想ありがとうございます
！！更新遅れてごめんなさい」

穂「次回もぜひ呼んでください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3168x/>

その想いは変わりますか？CHILD STORY

2011年12月29日09時52分発行